

筑波大学 博士(文学) 学位請求論文

# 中近世移行期における村落内身分の研究

## 論文概要

蘭部 寿樹

本論文の目的は、室町時代後期から江戸時代前期（一六世紀初頭～一七世紀中期）を中近世

移行期とし、村落民の身分構造の究明を通して、この時期の村落構造を解明することにある。村落の行事・祭祀を維持した村落民の身分体系(村落内身分)とその費用負担体系(村落財政)のありかたを、中世後期から近世前期の各段階で把握することにより、中近世移行期村落の特質を究明した。本研究では、従来、惣村・宮座が論じられてきた畿内近国を中心に、現在も宮座慣行が残る紀伊国を主要な場として設定した。

序章では、中近世移行期村落に関する従来の研究が中世・近世それぞれの側から独自になされておき、そのために中近世を一貫して見通す観点が欠落している状況を指摘した。そのうえで、中近世移行期を一つの時代相として捉え、この時期の村落をその内側から問い直すことの研究上の意義を論じた。

**第一章「乙名・村人の形成と臈次成功身分」**では、村落内身分である乙名・村人身分が中世後期に形成したことを、村落財政と村落官途との関連から追求した。村落内身分が村落財政を基盤とした臈次成功身分であることを指摘した。**第一節「乙名・村人の形成」**では、「住人」呼称・「村人」呼称を手がかりに乙名・村人身分の形成をあとづけた。一二世紀末期以降、「住人」呼称は儀礼的・形式的に用いられるようになり、その一方で百姓呼称が頻用されはじめた。百姓呼称の増加は、村落集団内における「住人」呼称の政治的・社会的な意義を低下させた。一二世紀に悪党が村落集団から析出したことにより、古老・住人集団は、変動・分解の危機的な局面にたつた。これと並行して古老・住人集団に対して「下からのつきあげ」がなされた。・の要因から、古老・住人集団の諸機能は各村落に分散し、乙名・村人集団に継承された。これにより、一二世紀中期に古老・住人身分から乙名・村人身分へ転換したのである。**第二節「村落財政と乙名・村人」**では、乙名・村人の村落財政収入には惣有地と宮座役(頭役・官途直物)があることを指摘した。惣有地は、莊園免田と、新たに乙名・村人らの寄進・買得により集積した田畠や山林などである。免田も含め惣有地は、乙名・村人集団が管理しており、村落宮座独自の財源であった。宮座役のうち頭役は、主に恒例年中行事を運営するための重い負担であった。官途直物は、烏帽子成、官途成、乙名成、入道成などの際に、その儀礼の該当者から村に醸出された直物のことで、一定期間プールしたり一時期に集中して収取して、臨時の大支出である村落寺社造営などの費用に充てられた。頭役にも「込頭」・「料頭」など臨時の支出に対応するものがあり、恒例の仏神事に官途直物が充てられたこともある。頭役と官途直物は村落財政の一環として共通する面があったのである。また官途成と同じく頭役にも、通過儀礼的な性格があった。頭役や官途直物は乙名・村人身分の者のみが勤仕でき、それ以外の村落住民は排除されていた。村落官途は、乙名・村人の身分標識のひとつである。**第三節「村落官途と乙名・村人」**では、成功制との関連から村落官途の形成と展開を論じた。莊内寺社の修造費用を村人が負担すること、すなわち村落成功によって、村落官途は形成した。村落官途は、村落成功の後身である村落宮座における官途成の儀礼を通過することにより乙名・村人身分の者が得ることのできた、身分的特権

であった。**第四節「臈次成功身分」**では、成功制と村落官途成との関連を乙名・村人身分のありかたから考察した。まず数多くの村落官途のなかに五位職があることを指摘した。村落民衆が五位の称号を名乗ったことは、律令制的位階秩序の形骸化を象徴している。村落官途の形成・展開などにより、成功制は形骸化した。つぎに村落官途のありかたを、村落内における身分差別の観点から考察した。村落内身分差別は、中世前期における宮座集団からの疎外に加え、中世後期からは官途名を介する差別により一層強化され、近世村落にも深刻な影響を及ぼした。乙名・村人身分は、集団加入年齢（年臈）による階梯的秩序（村の臈次）と、頭役や官途直物などの負担（村の成功）とによって維持される「臈次成功身分」である。中世の村落内身分は、身分の内実としては臈次成功身分なのであった。

**第二章「乙名・村人から年寄衆・座衆へ 紀伊国東村を中心に」**では、中近世移行期において、村落内身分が乙名・村人身分から年寄衆・座衆身分へと推移したことを、紀伊国東村を主な事例として明らかにした。この年寄衆・座衆身分は、宮座と一体の村落内身分であり、中近世移行期以降に特徴的に認められるものである。**第一節「村落財政の動揺」**では、村落内身分の変化の前提である一六世紀中期からの村落財政の動揺・変貌を概観した。領主による没収等の惣有地の動揺・解体により、宮座役負担がさらに重くなりその徴収も困難になってきた。その一方で、頻発する山林などの堺相論にかかる裁判費用などの支出も増大し、村落は借金を重ねるようになった。収入の限界・支出の増大という逼迫した財政状況に対応するため、新しい収入源として「村の棟別銭」すなわち「家役」が登場した。中近世移行期、村落財政の財源は、動揺しながらも次第に惣有地・宮座役から家役へと変化していったのである。**第二節「審判からみた乙名・村人及び年寄衆・座衆」**では、村落民の名前から、乙名・村人から年寄衆・座衆への推移を考察した。一五世紀後期までは、官途名、法名、氏姓型排行が一般的である。一六世紀には、官途名、単なる排行、氏姓型排行が一般的となる。成人男子でも幼名を名乗るようになり、官途名や単なる排行が増加した。これは、官途成など宮座儀礼の硬直化とそれに対する反発によるものであった。また法名が激減するが、これは年寄衆・座衆の村落運営が動揺していたことを示している。**第三節「紀伊国東村における村落財政の変質と宮座の分裂・変質」**では、一五世紀末期から一六世紀初期の東村で、有力な乙名・村人が高利貸活動などにより用水権を集積し、その一方で村落外に加地子得分や用水権などが流出していた点をまず指摘した。それに対し東村は自力で諸権利の回収をはかったが、一六世紀には村落定書の規制にとどまった。その背景には、東村の借錢や惣有地の減少など、村落財政の深刻な動揺があった。これに並行して東座と対立し疎外された西座構成員は、守護勢力に内通し被官化した。そのため東村宮座は、西座を排除して東座一座で再結集を遂げ、領主粉河寺の氏人身分を受容して氏人中となった。一方、村落財政の動揺に対応して、非宮座成員にも家役を賦課した。その反対給付が非宮座成員の入座（新座衆）であった。これに対応して氏人身分は、新座衆を（宮座内）差別するものであった。しかし一六世紀中期から村

落財政の主導権は、東村宮座から中村（東野）・井田・池田垣内という東村内の三集落へ移行していく。近世の年寄衆・座衆集団は、政治的・経済的な主導力を失い、単なる祭祀集団となった。

**第三章「年寄衆・座衆と近世村落 紀伊国荒川荘・大和国竜門惣郷を中心に」**では、紀伊国荒川荘・大和国竜門惣郷を事例とし、中近世移行期に年寄衆・座衆身分が変質し、村落内身分が中世の臈次成功身分から近世の家格制へ変化したことを明らかにした。**第一節「紀伊国荒川荘における年寄衆・座衆」**では、年寄衆・座衆が山野や墓所などの共同利益を基盤として、宮座や葬祭などに関して荒川荘を統括していたことを指摘した。その背景には、年寄衆・座衆を中核とする「庄中」の収取請負体制があった。**第二節「年寄衆・座衆の再編と変質」**では、荒川荘宮座に新座衆が進出し、新座衆が八幡講、年寄衆・座衆が宮講大日講を結んで互いに対立していた状況を指摘した。そして、新座衆との対立のなかで、年寄衆・座衆は弱体となり硬直化していった。**第三節「年寄衆・座衆と庄中の意義」**では、近世（寛永期）の庄中には年寄衆・本座衆で庄屋である者がみられると同時に、新座衆の庄屋が代表の一員となっていることを指摘した。このように、年寄衆・座衆が形骸化し、庄中が再編した。しかし一方、寛永期でも年寄衆・本座衆が庄中の代表者となっており、天正期以来の「当番」制などの運営方式を維持していた。そしてその庄中は、中世以来の村連合体としてのありかたを維持して、近世領主の新たな分裂的な支配に対抗していたのである。**第四節「大和国竜門惣郷における宮座と家」**では、大和国竜門惣郷を事例として、中近世移行期の惣郷宮座に家の論理が導入されることによって、惣郷宮座が変質・衰退し村落民が個別村落宮座へ結集していった状況を明らかにした。その背景に臈次成功身分から家格制へという村落内身分の転換があったことを、家役や新座衆の関連から指摘した。このように年寄衆・座衆身分は、臈次成功身分としてもとも年齢階梯的な身分秩序であったが、次第に硬直化して年寄衆の家・座衆の家・非座衆の家というような形で家格に固着したものとかわっていったのである。

**終章**では各章をまとめて、村落内身分とは、村落集団によりおのおの独自に認定・保証され、一義的にはその村落成員の間で通用し、村落財政により支えられた身分体系であると規定した。そのうえで、中近世移行期における村落の特質は、村落宮座の結集原理が臈次成功身分から家格制へと変化したこと（中・近世村落の断絶面）、村落内身分秩序が家格制という形で近世村落にもたらされたこと（中・近世村落の連続面）の二点にあると結論づけた。そしてこの結論をもとに、村落内身分を軸にした新しい村落史研究を展望した。

なお本論文は、加筆・再構成のうえ、『日本中世村落内身分の研究』として校倉書房より刊行した。